
キス・キス・キス

久芳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キス・キス・キス

【Nコード】

N3206I

【作者名】

久芳

【あらすじ】

はじめての彼氏と、初めてのキス。綾音はそれを拒んでしまった。キスはいつたいたいとするものなのか、なにを感じるものなのか。友達に訊いてもうまく教えてもらえず、綾音は『キス』というものについてひたすら頭を悩ませる。

「——ちよ、つ、と、待って！」

とっさに、あたしは両手を前につきだした。

急いで、身体を離す。つきだした手で肩を押した。

とにかく、離れたいの一心だった。

「……綾音？」
あやね

敦司が、不思議そうにあたしの顔をのぞきこんでくる。せつかく離れたのに！ と心の中で叫んで、あたしはぶんぶんと首をふった。
「待って。待って！」

近づいてくる肩をぐつと押して、あたしは敦司と腕一本の距離をとる。必死なあたしの声に、ようやく彼も接近をあきらめてくれた。
「……どした？」

頭を撫でられそうになって、びくりと身体が反応してしまう。敦司の顔を見れなくて、あたしはひたすらうつむいていた。

放課後。誰もいない教室。外から運動部の声が聞こえてくる中。夕陽がさしこむ窓にもたれかかって。二人でたわいもない話をして手なんかつないじゃって。お互いの肩が近くにあるわけで。付き合ってるんだから、そういう流れにもなるわけで。

……でも。

「ほんとに、キス、するの？」

かすれる声をどうにかふりしぼって、あたしはちらりと敦司^{あつし}を見上げる。隣にいたはずの彼はいつの間にかあたしの真正面に立って窓枠に手をつき完全にあたしの逃げ場を封じてしまっていた。

「……したくないの？」

「いや、別に、それでも……」

やっぱり、顔が見れない。なにより、目を見れない。次第に近づ

いてくる敦司が、そんなあたしを見てくしやりと笑った。

あ、やばい。思ったと同時に、押しのけていた肩が近づいてくる。あたしの抵抗する力なんて、彼にとってはなんの障害にもならなかった。

顔が近づいてくる。唇が近づいてくる。敦司の吐息が、あたしの鼻先をかすめる。反射的にまぶたをとじた。

キス、される。

「——い、や、だ！」

あたしは、叫んだ。

●

付き合おうと言ったのは敦司のほうだった。

高校に入学して同じクラスになって、すぐに仲良くなったのが敦司だった。一緒に話したりするのがすごく楽しくて、あたしも敦司が嫌いじゃなくて、むしろ好きだなと思ったから付き合うことにした。

ロマンチックな告白はなかった。ただ、話の流れで『付き合い合ない？』と言われて、あたしもあっさりと『いいよ』とうなずいた、そんな簡単なやりとりで決まったことだった。

別に付き合うつていったって、今までとあまり変わらなかったし。まわりの反応も今までと変わらなかったし。変化といえば、話す距離が近くなったり手をつなぐようになったりしたくらいだけど、別にそれに対して抵抗なんてまったくなかったしむしろ嬉しかった。でも、キスだけはだめだった。

結局あの時、あたしはキスする直前で、叫びながらしゃがんで床にうずくまった。右も左も逃げ場がなくて、それでもよく下を思いつけたなと我ながら感心するけど、それぐらい頭が必死だった。

あたしの全力の抵抗に敦司もさすがに身を引いたけど、ほんとうに、あの時のあたしは必死だった。あれほど敦司から離れたいと思っただけはなかった。

「……ばかだね、綾音は」

「言わないで」

直球すぎる言葉に、あたしは机につっぱした。

勢いよくいきすぎて、がたと揺れた机の上でコーヒ―牛乳のパックがぱたりと倒れる。ほとんど空だったから、ストローから中身はでてこなくて。それを無言で直してくれる侑ちゃんに、あたしは昨日のキスの顛末をすべて相談したのだった。

ほんとうは、帰りに敦司に家まで送ってもらって、部屋にはいつでもすぐに電話で相談したかった。でも侑ちゃんにはつきあいの長い年上の彼氏がいて、放課後からデートすると聞いていたから遠慮した。登校一番に話したかったけど、侑ちゃんがもの見事な遅刻をしたので、落ち着いて話できたのは昼休みになってからだった。

お昼ごはんはいつも、敦司と食べている。でも今日は敦司が委員会の日なので、いない。なんて素敵なタイミングと思いながら、あたしは黙々と小さなお弁当をつつく侑ちゃん相手にえんえん語り続けた。

そして言われたのが、ばか。

「いいじゃん別に、キスぐらい」

「ごちそうさまと手を合わせて、侑ちゃんはお弁当箱を片付け始める。長い黒髪を耳にかきあげるしぐさがすばらしく様になる彼女に、あたしは今までのいろんな相談をしてきた。」

「いろんな分野で経験豊富な侑ちゃんだからこそ、普段言えないようなことまで訊くことができる。彼女の答えはちよつと冷たいけど、下手に遠まわしに言われるより全然良かった。」

「押し倒されたわけじゃないんだしさ、しちやえばよかったじゃん、キス」

「いや、そうなんだけど……」

「お互いのことなにも知らなくて初々しいカップルならまだしも、綾音たちなんて付き合うのも時間の問題だっていうぐらいの仲だったじゃん。付き合って一ヶ月までキスはだめだとか、そういうふうに決めてるわけ？」

「いや、別に……」

牛乳をかけたばかりのコーンフレークみたいなざくざくした言葉に、あたしはただ口ごもることしかできない。お昼ごはんのパンはほとんど口に入らなくて、手持ち無沙汰にすすっていたコーヒー牛乳もついにずずずとしかいわなくなった。

「展開的にも、綾音の理想そのものだったんじゃないの？ 誰もいない放課後の教室で、夕陽を浴びながら好きな人とファーストキスとか、あんたが私に読めっておしつけた漫画のシーンそのまんまだったじゃん」

「それは、そうなんだけど……」

侑ちゃんはあたしの恋愛経験を知っている。今まで誰とも付き合ったことがなくて、キスなんてもちろんしたことのない、いつも少女漫画を読んでは夢を膨らませていた妄想乙女だってことは言わな

くてもすっかり見抜かれてしまっていた。

「敦司のことが嫌いなわけ？」

「うつん、違う」

「好きなんでしょ？」

「うつん」

敦司が好き。その気持ちに嘘はない。好きじゃなかったら付き合おうって言われてOKしないし、手をつなぐとかそういうこともできなかったと思う。別にあたしは男子が苦手なわけじゃなく、ただなんとなく、今までそういう色恋にご縁がなかったただけだった。

敦司のことは好き。一緒にいて楽しいし、気疲れもしない。友達よりも大きな存在で、つないだ手のあたたかさとちよつと意地悪だけど優しいところが大好きだった。

「じゃあなんでキスしなかったの？」

「それは……」

あの時の自分が、今の自分にはよくわからない。

でも、もし今のあたしが昨日と同じように敦司とキスしそうになったら、やっぱり拒んでしまうと思う。キスする、と思った瞬間、頭の中が真っ白になって逃げてしまうと思う。

「だって……やりかたとか、わかんないんだもん」

「やりかた？」

普段は冷静なはずの侑ちゃんの声が、見事に裏返った。

「なに綾音、そんなこと考えてたの？」

「だって……わかんないんだもん」

「それこそ全部敦司にまかせちゃえばいいじゃん」

長いまつげが縁どる目をまんまるに見開いて、侑ちゃんは全身で信じられないと語っていた。たしかに侑ちゃんには、あたしの考えていることなんてちっぽけなこともしれないんだけど。

「だってさ、キスするときって、どうしてたらないの？ 息とかとめるの？ 首はそのままでもいいの？ したときってどうすればいいの？ 味とかはするの？」

「味って！」

こらえきれなくなったらしく、侑ちゃんがふきだした。

「綾音、そんなことまで考えてんの？　いっとくけど、ファーストキスはレモン味なんて絶対嘘だよ！」

「わかってる！　でも、やっぱり気になるんだもん！」

「だから、してみればいいんだって！　一回やったらわかるから！」
「はははは、と、侑ちゃんが豪快に大きな口をあけて笑う。その声にクラスの視線が集まって、あたしは顔が熱くなった。

「だって、だって……！」

頭がいっぱいいっぱいになって、だってしか言えなくなる。だってだって。だってさあ。繰り返すあたしに、侑ちゃんが手を伸ばして乱暴に頭を撫でた。

「悩め、乙女。漫画でも映画でも見て、思う存分研究してなさい」

結局侑ちゃんは、あたしが知りたいことをほとんど教えてくれなかった。

●●

『漫画でも映画でも見て、思う存分研究しなさい』

侑ちゃんはその言ったけど、あたしが求める情報は、漫画や映画ではほとんど得られなかった。

少女漫画やラブロマンス映画には、必ずキスシーンがある。みんなみんな、当たり前のようにキスをしている。そのキスは甘いものであったり切ないものであったり、ちょっとしたハプニングであったりするけれど、みんなごく自然に唇を重ねている。微笑みあいながらしたり、涙ながらにしたり、シチュエーションはいろいろだけど、みんなキスであれこれ考えている様子はない。

でも、あたしは考えてしまう。

キスってどうやってするんだろう？

どうやって、の範囲が広すぎて、考えてしまったらもうとまらない。どういう流れですることになるのかだけは、あの未遂でなんとなくわかった。

知りたいのはそれじゃない。キスしたい気持ちとか、キスする雰囲気とか、そういう空気じゃない。知りたいのは、方法。

方法というか、世間一般的なやりかたというか。大まかな流れはわかる。最終的には顔と顔を近づければいいのはわかってる。

知りたいのは、細かいところ。

目はいつ閉じたらいいんだろう。ずっと閉じたまま、相手を待っているのはなんだか不安。でも開けたままっていうのもなんか違う気がするし、ついでにいうと開けていたらどこが見えるのかも気になったりする。

みんなキスをするときって目を閉じているけど、あれはいつから閉じてるんだろう？ 目を閉じたままキスしたら、キスする場所とかずれたりしないのかな？ 間違って違うところにキスしちゃったらどうするんだろう？

でも、やっぱりキスって至近距離だから、ずっと唇見て顔近づけるわけにもいかないだろうし。最終的には感覚なのかな？ それともなにか、本能的に相手の唇の場所がわかるようになってるのかな？ たまに、相手からの一方的なキスで目が開いたままのときとかもあるけど、でもそれはされた側なわけで、したほうはやっぱり閉じてる。勢いでキスしたのに、ちゃんと唇は重なってる。

目って、必ず閉じるのかな？ 開けたままでもいいのかな？ 開けていると、相手のどこが見えるんだろう？
そもそもどうしてキスなんてするの？

「……聞いてるか？ 綾音」

敦司の声で、あたしは我に返った。

「委員会ですることまだ残ってるから、終わるの遅くなりそうなんだわ。今日は先に帰ってて」

あたしたちのクラスの生徒は、放課後になるとみんな教室から去っていく。もんもんと考えごとをしているうちに、あたしは教室で一人ぼつねんと残されていたようだった。

「別に、なんにも用事ないし、待ってるよ？」

「いいんだ、帰ってて」

窓際のあたしの机に手について、敦司はちらりと外を見やる。野球部のかげ声がよく響くグラウンドを見るまなざしを、こうして下から見上げていると、なんだかいつもと雰囲気違って見えた。

けどそのよそ見も一瞬のことで、敦司の視線がぱつとあたしに戻る。無意識のうちに、あたしは彼の目ではなく、眉の辺りを見るようにしていた。

キスの一件は流したはずだと思ってたのに。まだ、余韻が頭の中

で残ってしまっている。

「……また、なんか考えてる？」

「ちよつと、ね。ごめんね」

ほっぺをしばしと叩いて、あたしは意図的に敦司の瞳を見た。黒目がちなその目を見ながら喋るといつも落ち着くはずなのに、今日はなんだかとても落ち着かない。

平気なふりをしているつもりだけど、鋭い敦司には気づかれているみたいで。しげしげとあたしの顔を見つめてくると思ううちに、彼は腰をかがめて顔を近づけてきた。

キスをしようってわけじゃない。それは空気でわかる。たぶん敦司は、あたしをからかってわざとやってるんだ。

でも、あたしの目は敦司の唇に釘付けになってしまう。

話すときはよく動いて、静かなときはぼんやりとしていて。その薄い唇が、今日はちよつと乾いて荒れている。

敦司とキスするって、どんな感じだろう？

「……綾音」

「ん？」

唇から目を離すと、待ってましたといわんばかりに、敦司が動いた。

目の上。まぶたのあたり。そこに一瞬だけ、キスされた。突然のこと、身構える余裕もなにもなかった。

あわてて身体を離すあたしに、彼が笑う。声はなく、表情だけの笑みに、驚いたんだか悔しいんだか嬉しいんだかわからなくなつて、あたしは唇を噛んだ。

「綾音も案外、ガードがゆるいな」

「だつ、て……！」

まるで子供のように、わしゃわしゃと頭を撫でられる。それにまた胸のあたりがつまって、あたしは思わずうつむいてしまった。

「これでまたキスしようとしたら、逃げるんだろ？」

「あ……」

その声色に、いっぱいいっぱいになっていたあたしの頭が、はつと我に返った。

顔を見れなくても、わかる。敦司はきつと、傷ついている。いつもは飄々としてる声に、すこしだけ、隠しきれない翳りがある。

キスしようとして拒まれたんだもの、傷つくのは当然なわけで。あたしだってはつきり、敦司にどうしてキスしたくなかったのか言っていないわけで。

キスのしかたとか、そういうのを考えるのだって結局あたしだけの話で。敦司はただ純粹に、あたしにキスしたいって思ったからキスしようとしてくれたわけで。

それを拒んだんだから、絶対、傷ついている。

「……ごめんね、敦司」

「なにが？」

「キス、嫌がつて、ごめんね？」

ちらりと見上げると、敦司はまた笑った。でもやっぱり、目元が笑いきれていない。本人もぎこちない笑みに気づいているようで、困ったように目尻をこすりながら、離れた手でまたあたしの頭を撫でてくれた。

「大丈夫だ」

「……ごめんね？」

「あんま言うな」

「……ごめん」

「次言ったらほんとにキスするぞ」

「……………」

黙り込むあたしに、敦司がやわらかく微笑んだ。その笑みにかたさはなくて、あたしもすこし、ほっとする。

「じゃあおれ、委員会戻るから」

「うん。先、帰ってるね」

また顔が近づいてきて、どきっとする。でも敦司はあたしとおでこをあわせるだけで、ほんとにそのまま行ってしまった。

その後ろ姿を見ながら、あたしは自然と、キスが降りてきたまぶたを触ってしまう。そして、触れ合わせたおでこにも触ってしまう。

敦司の感触が、体温が、まだ残ってる。

なんか、ちよっと、キスできなくて残念。わがままにもそう思っている自分がいる。

敦司とほんとうにキスしたら。あたしはそのとき、一体なにを思っただろう。

●●●

『——綾音、まだ悩んでたの？』

「……うん」

電話の向こうから、侑ちゃんのははつと乾いた声が聞こえる。今日は彼氏との予定がなかったようで、お風呂あがりと聞いて想像した濡れ髪の彼女はちよっと色っぽかった。

『それ、キスしたくなくて悩んでるの？ それともしたくて悩んで

るの?』

「……したくて、悩んでる」

ぽそつと呟くと、また笑い声が聞こえる。さっきのちよつと冷たい声じゃなくて、親しみのある、色っぽい笑い声だった。

『だから敦司にしてもらえって言ってるんだけど、綾音は違うんだもんね。……しゃーない、このお姉さんがすこしぐらい悩みを聞いてあげようじゃない』

どんとこい、と言う侑ちゃんがとても頼もしい。それにちよつとだけ笑って、あたしは自分の部屋で、ベッドを前に無意識のうちに姿勢を正していた。

「……侑ちゃん、はじめてのキスってどんな感じだった?」

『教えない』

えーっ! と抗議するあたしに、彼女は『当たり前じゃない』と言った。

「だって、教えてくれるって言ったのに!」

『初キスの話をするとは誰も言ってます。どうせ綾音だって私の初キスの話聞いてもなにも参考にならないんだし、私だって思い出にとっておきたいのよ』

侑ちゃんの口から、思い出という言葉が出るとは思ってもみなかった。一体どんなキスだったんだろう……と深く訊きたいけど、そうしたら怒って電話を切られかねない。あたしははややと話題を変えた。

「キスするときの狙いって、どうやって定めるの?」

『狙いって、ほんとにどこまで考えてるのよ……まあでも、そうだね、場所がずれるときとかたまにあるよ。ずれてもむりやり直せばいいんだし』

「目は、いつまで開けてるの？」

『開けたままする人もいるけど、どうなんだろうね。私は自然と閉じちゃってるし……』

そこまで言って、侑ちゃんがふっと笑った。

『そんなことばかり考えてるわけ？』

「だって……」

『目閉じて待つてたら、敦司がちゃんとキスしてくれるってば。別にいじわるもなんもしないだろうし、してみたら場所とかそういうのもどうでもよくなるもんだよ』

「……目、閉じてないとだめなの？」

『別に開けててもいいと思うよ？』

にやにやと、含み笑いを浮かべる侑ちゃん表情が想像できる。ずいぶん面白がられているなとは思いつけど、でもやっぱり、あたしは知りたかった。

「……じゃあ、さ」

『もう終わり。やっぱり私には、やってみればわかるってしか言えないもの』

じゃあね、おやすみ。実にあっさりと一方的に、侑ちゃんは電話を切った。その早業にあたしは呆然とするしかなくて、かけなおす気力も、メールを打とうという気持ちもなにもわかなかった。

力が抜けて、カーペットに横たわる。自然と指先は唇にのびていて、そして頭には、敦司の顔とその唇ばかりが浮かんでくる。

敦司があたしにキスしようとして。

顔が、唇が、近づいてきて。

そのとき、あたしは……。

●●●

「——敦司とキスしたい」

呟いてから、あたしは一体なにを言ったんだ！　と心の中で叫んだ。

相変わらず、放課後になると誰もいなくなる教室。今日は委員会がないから、いつもみたいに敦司とどうでもいいことを話していた。テレビの話とか授業の話とか、まったくそういう流れになっっていた。かつたはずなのに、あたしは気づいたらそう言ってしまった。

「……したいの？」

真っ赤になっっているであろう顔がはるかしくて、思わず手で隠してしまう。指の間でちらりと様子をうかがってみると、敦司はばかりとあたしを見ていた。

その顔が、またにやついている。動いたと思って身構えると、敦司はなにもせず、椅子を引いてあたしを見上げるように座った。

「手で隠してたら、できないけど？」

「ちよつと……待つて」

なかなか、顔から手を離せない。自分から言い出してためらうなんてわがままを、敦司はなにも言わずにゆるしてくれた。

「……敦司の、さ」

「ん？」

「敦司の初キスって、いつ？」

「小学校三年生」

あっさりと言われて、侑ちゃんみたいに教えてもらえないと思ってたあたしは、とっさに言葉が出てこない。そんな様子に、敦司はまた笑った。

「好きな子にさ、勢いでしたんだよな。首をかたむけるとかそういうのなんもなしで、鼻がぶつかるような真正面からのキス」

思い出すと、ちよつと笑えるんだ。そう言う敦司の眉間に、すこ

しだけしわが寄った。

「最初がそうだったからさ、別にキスに対してあれこれ考えるとかなかったな。ごめんな、気づけなくて」

その口調から、侑ちゃんの気配を感じた。一体彼女はどこからどこまで言ってしまったんだろうと思って、深く考えるまいとあたしは思考をかき消す。

「あたしこそ、ごめんね？ 結局ひとりであれこれ考えて、わがままだったよね」

「大丈夫、気にしてないから。むしろこんなのおあいこだし」

な？ と、敦司が顔をのぞきこんでくる。そこでようやく、あたしは顔から手を外すことができた。

まっすぐに、敦司と目があう。それだけのことが、なんだか久しぶりに思えてしまう。けれど敦司はいつまでたっても座ったままで、ふいににやりと笑ったかと思うとそのまま目を閉じた。

「綾音からして」

「えっ」

「綾音からすれば、大丈夫だろ？ おれは動かない」

明らかに楽しんでいる様子が伝わってくる。どうしてあたしもそれに怒れず、むしろ胸がつまってしまっただろう。笑いをこらえるようにむずむずと動く唇のまま、敦司はあごをそらしてあたしに催促する。

あたしがするまで、敦司は絶対動かない。

雰囲気で、それがわかる。もう戻れない。今ここであたしがしなかったら、また、この間の自分たちに戻ってしまう。

ふるえをおさえこみながら、あたしは敦司の頬を両手で包み込んだ。

end

いつもならあたしがこうされる側なのに。なんだか違和感を感じるけど、どこか居心地がいい。敦司のこんな表情、めったに見れるものじゃない。

でも、キスするといったら話は別。あたしは手をそえたまま、硬直して動けない。顔を近づけようと思って、のぞきこんで、でもそれ以上、動けなかった。

どうしたらいいんだろう。どうやって狙いを定めたらいいんだろう。目はいつ閉じるんだろう。息はとめたほうがいいのかな。もし位置がずれたら笑われないかな。

たっぷり時間をかけて悩んでいても、敦司は目を開けてあたしを助けようなんてしてくれない。口元なんてもう完璧に笑っていて、いつそ噛み付いてやりたいと思うけど結局それもキスなわけで。

だめだ、できない。

でも、したい。

頭の中が忙しい。

敦司のことが好き。付き合う前から好きだった。

でもそれはなんとなくの好きで、嫌いじゃないっていう好きで。一緒にいて楽しくて苦にならなくて、好きか嫌いかって訊かれたら絶対好きな人で。

敦司に付き合おうと言われて嬉しかったし。素直にうんと言えたし。付き合ってもあまり普段と変わらなくて、でも一緒にいるのがほんとうに楽しくて。

付き合ってるんだから、いずれはすると思ってた。キスなんて当たり前にすると思ってた。敦司が好きだから、できると思ってた。

でも、好きすぎて、できなかった。

しかかったけど、こわくてできなかった。してみたかったけど、不安だった。

今もそう。最後の最後で動けない。

唇が近くにありすぎて、お互いの吐息が混ざり合っている。ほのかに息のぬくもりを感じる。あとすこし、このまま近づけば、キスできるのに。

「……できないよ」

「して」

「敦司からして」

「綾音がして」

逃げようとしたら、頭に手をまわされてできなかった。もう、距離が近すぎて、相手の顔もなにもわからない。

かすかに、敦司が動く。でも、このままされるんじやだめだ。そう思っ、あたしも、ほんのすこしだけ、唇を寄せてみる。

思わず、目をつぶってしまう。唇の裏を、ほんのすこしかみ締める。ふるえる息を止められない。もう、場所なんてどうでもいい。

唇に、なにかが触れる。これがきつと、敦司の唇なんだ。

ほんの一瞬で、唇は離れた。表情がわかるくらいに顔を離して、敦司と目が合っ、ようやく安心して息をつけた。それは敦司も同じようで、大きなため息をついたあと、なんだか恥ずかしくなっ、お互い笑ってしまった。

唇の、ほんの先っちょだけが触れたような、そんな淡いキスだった。

それがなんだかもどかしくて、つい、唇を噛んでしまう。両手はまだ敦司の頬にあるから、指で触って確かめることもできない。

「……もう一回、して」

あたしが消え入りそうな声で言うと、敦司はほんとうに、またしてくれた。

さっきの、触れるか触れないかのキスじゃない。ちゃんと唇と唇が重なるキスだった。

離れたと思ったら、また、キス。敦司の唇に包まれるような、深いキス。離して、角度を変えて、また、キス。

自然と、目は閉じていた。息もしていた。何度もキスをして、そのたびに敦司を感じた。やわらかさと、あたたかさと。こんな場所、自分ひとりじゃ感じられない。唇の感触は、キスじゃないとわからない。

下唇を吸われて、舌で撫でられる。中に入ってきてそうになってあたしがびくりとふるえると、無理にしないでまたもののキスに戻った。

一度キスすると離れたなくなつて、ずっとしていたくなる。敦司が唇を離れたとき、だからあたしはすごく切なかつた。

敦司が離れてしまう。キスが終わっちゃう。

あたしは頬に触れていた手を離して、指先で敦司の唇の端を探した。

そこをしるしにして、あたしはまた、唇を敦司に寄せた。

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3206i/>

キス・キス・キス

2010年10月8日15時26分発行